



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二五〇号）

りっか
立夏

五月五日

菓子の瑞色鮮やかなり

菓子を目指して伊勢へ。第二十七回全国菓子大博覧会・三重大会「お伊勢さん菓子博2017」が人気を呼んでいます。

菓子博は、明治四十四（一九一）年の帝国菓子飴大品評会（東京）から始まり、金沢、京都、名古屋など各地で約四年に一度開催してきました。戦争などで一時中断はあったものの百年以上続く菓子博で、初めて三重が会場となりました。そのテーマ館で存在を放つのは、やはりお伊勢参りの道中、橋のない宮川を渡った「宮川の渡し」を表した巨大工芸菓子です。江戸時代の絵師、歌川広重の版画をモチーフに、参宮者をはじめ、宮川も渡しの船も、おかげ犬も桜も菓子の材料を使って表現されていました。

そして、全国の菓子職人による工芸菓子も見どころの一つ。伊勢の御木曳車や地元三重の食材、四季折々の花や鳥、風景がずらりと展示されているのです。風にそよぐ幟のぼりや薄い花びらなど、細部にまで手の込んだ作品に、菓子職人の情熱と技術がうかがえました。

ふと京都の老舗菓子司の展示に足が止まりました。

「瑞色鮮ずいしよくあざやかなり」という言葉が、鳳凰ほうおうと牡丹ぼたんの花の前の料紙に記されています。なんでもおめでたい姿や心が鮮やかに景色を彩っている様子で、祝いの席で用いられてきた言葉といえます。そして争いや災いのない世の中の到来を願い、震災により被災された地域の真の復興を祈って製作したとその思いがつづられていました。和菓子は地域の四季を色に、花鳥風月を形にしてきました。そこには平和な世への願いも込められていたのです。菓子の神髓しんずいに気づかされたように思いました。菓子博は今月十四日まで、三重県営サンアリーナ周辺で開催されています。

文 千種清美

